

確かならず。

とある。

(27)

此の際筆者は必ずしも谷内の聚落が先づ發達してその谷口に伊黒の聚落が發達したといふことを言はんとするのではない。否、恐らく伊黒は畑谷の他の如何なる聚落よりも起原は古いのであらうと思はれる。聚落の起原と機能とが混同せられてはならない。何れにしても谷内及び谷口聚落の起原並びにその機能的關係に就いては更に今後の研究が必要であると思ふ。

(28)

高島郡誌 一五〇頁に
天満宮 大字高島字大町に鎮座す。祭神菅原道真。俗に徳宮と云ふ。

とある。

(29)

高島郡誌 一四九頁に
日吉神社 村社。大字高島に鎮座す。高島の氏神なり。祭神大山咋命。舊日吉大行事と稱せり。例祭五月五日。とある。

フィンランドの想ひ出 (一)

本間 不二男

一、ポーランド

一九三二年十一月二日の朝八時三十五分一行はベルリンのツォーバーンホーフを出發してモ

スカウの旅に立つた。其の夜と次の夜とはワルシャワに泊り、四日の朝七時十分此處を立ち五日目の朝九時三十分モスカウの停車場に着いたの

である。

ベルリンからポーランド國境迄は例の松林だけから成る地味の悪い砂地であるが一度國境を越えてポーランドに入ると綠濃き麥畑が見渡す限り開けて如何にも其の土地の肥沃な事が感ぜられる。勿論此處は大戦前にはドイツ國の一部をなした所であつて、其の中心なるポーツェンは煙突の林立する工業地である。ドイツは此の北方では其の領土を中斷されてポーランドに海岸を與へ、南では又シレシヤの炭田をポーランドやチエコスロバキアに奪られ、かくて松原の砂地だけがドイツに残されたのであるから、ドイツ人の怒るのも道理であると考へさせられるのである。

ワルシャワは何となく汚らしい感じのする街であつた。大戦後も大戦前と殆ど變つた事がないらしく、新築の役所を目新しいものとして案内してくれた程も進歩のない街であつた。我々が此處に遊んだ頃は國民が非常にドイツに敵

慨心を持ち獨逸から來た我々に獨逸語で話す事をすら快しとしなかつた程であつたが、最近は餘程様子が違ふ事と思はれる。ワルシャワには其の年の春頃に主に學生から成る日波親善の爲め盡さんとする日波協會が出來、二日目の夜には些やかな御馳走を用意して數十名の男女の若者達が我々を迎へてくれ、一夜を楽しく過したのである。此の様な氣圍氣の時だつたから同地滞在中我々は大いに諸方面から歡迎され、到着の夜は外務大臣から夕食の御馳走があり、翌日の晝も市から御馳走があつた程である。此の様な譯でジュネーブに居るポーランド代表が國際聯盟の席上で盛んに日本に毒ついてゐるのは凡そ違つた空氣があつたのである。それはポーランドが東にもロシアといふ大敵國を持つてゐるのでその後にある日本と結ばんとする心根であることは言ふ迄もない。此の腹背に大敵を有するポーランドは従つて同時に完全な軍國主義國で、政治も經濟の悉く軍人の手に移つて仕舞つ

てゐるのも宜なる哉である。

ワルシヤワの思ひ出を語るに當り、ポーランドの以上の人々や在波國日本外務省の人々に茲に一言謝意を表する。

二、ロシア

ビクビクしてゐたロシアの國境も無事に過ぎて愈々ロシアの列車に乗り込んだ。一體此の旅は農勞國への旅であるからとて特に三等を擇んだのであつたが、此の汽車の中でよくよく農勞國旅行の苦味を味はされて仕舞つた。夜に入ると薄暗ひランプが車に燈され、汚い車體と共にそろ／＼我々の氣分を陰慘にさせたが、寢る時になつて愈々上中下三段の組板の様な板が寢臺と稱して下された時は實に心細くなつた。之一九三二年の冬のロシアなのであつた。汚い車と石油ランプの明り、それに板だけの寢臺。是から後の數日間ロシアの各地で見聞した文物は全く之れ以上の何物でもなかつた。

貧困・缺乏・壓政・呪咀是がロシア凡ての如

く見えた。我々はロシア革命第十五周年記念祭の汽車割引の機會を利用して此の地に旅行したのである

第一圖 革命十五周年記念祭に参加するため露都に到着せる外國團隊を迎へ歡迎の辭を放送中の景(5. XI. 1932 のモスカウ驛頭)



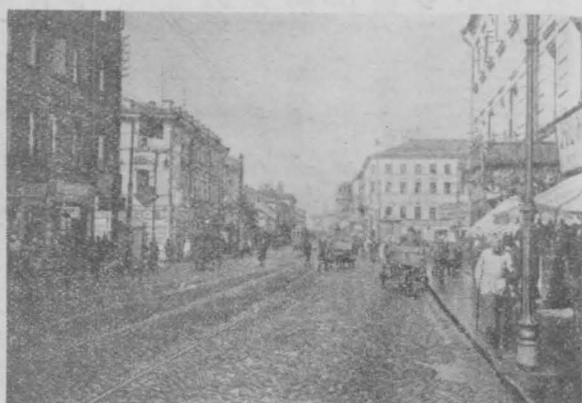
から言は
ビロシア
の最も華
かな時を
見たので
あらうけ
れども其
の印象は
實に右の
通りであ
る。

モスカ
ウの街に

入ると共に我々は同市には市内電車の外には殆どタクシーもバスもない事を發見した。唯我々は一箇の團體としてロシア政府の案内掛りが案

第二圖

荷馬車の多いモスカウ市街



内してくる所だけを觀た。然し我々はそれでもモスカウ第一流のホテルが拙いアパート程の

る靴を廊下に出しておけば盜まれる恐れのある事をも聞かされた。而して實際モスカウからレ

貧弱さであり食物も極めて不味ものであることを知つた。又たレニオングラードでは磨かせやうとす

フィンランドの想ひ出 (一)

第三圖

革命十五周年紀念祭の一裝飾

(レニングラード驛前のホテルオクトーベル)



ニングラードに行く途中同行の一人は車中でカバンを盜まれ、レニングラードに於いて自分分は小店でエハガキを買つてゐる間に外套のポケットに入れた手袋を盜れたのである。

モスカウやレニングラードで我々の觀た大

部分の人は弊履弊服をまとひ衣食住に極端に不足を感じてゐる様が見られた。帝政當時のロシアは勿論自分の知る所ではない。然し恐らく之よりは遙かによかつたであらう。それは全く之れ以下では人間が生きて行かれさうに思はれないからである。此の状態を基準とすればロシア人の生活が段々改善されて行くと稱することも第二の五年計畫によりロシアがある程度進歩することも當然であらうが、然も彼等が一九一四年以前の水準に達することすらなか／＼容易ではないことと思はれ、哀れなるロシア國民に對し一掬の涙なきを得なかつた。

ロシアから國外に出る時の税關の検査は更に嚴格であるとの事であつたが、レニンングラードで別れ、ラトヴィアを経てベルリンに歸つた人々は果して種々なる災難にあつたのであつた。或る人はロシアで買つた毛皮を沒收され、他の人は撮影した寫眞のフィルムを沒收されて仕舞つた。然し幸にしてフィンランドに入つた

我々は無事に國境通過が許され(?)、(許されるのは當然である)眞に虎穴を出てた想ひがあつた。

三、フィンランドに入る

かくて我々は苦難の一週間の後、天國に昇る思ひでフィンランドに入つた。

北緯六十度なる此の地方では日が暮れて二時間も経てから立つ汽車も時間表では十七時三十分(午後五時半)である。フィンランドに入つたのは午後八時と思はれたが、もう眞夜の感じだつた。

フィンランドの三等車は實に清爽である。客の中に獨逸語を話す人があつて我々を珍しがりしきりに話しかけて來た。我々の氣分は一度に明るくなつた。我々は又た廉い料金を出して寢臺を買つた。コンバートメントになつて居てクッションの軟く彈性のある立派な寢臺であり、毛布もついてゐる。三段にはなつてゐるがコンバートメントには三箇の寢臺があるだけなので頗る寢

心地がよい。

ドイツ・ポーランドで我々は始めてフィンランドの牛乳・パン・ビール等の食料を買ひ、一桁違へたの

第四圖 ヘルシンキ停車場



ではな
いかと
思はれ
る様な
物價の
廉さに
吃驚し
て仕舞
つた。
ロシア
は正式
に食物
を買へ
ば歐洲
の他の
互に隣

國より十倍近くも高價なのであるから、

フィンランドの想ひ出 (一)

り合つたフィンランドとロシアとで同じ物の値段が外國人に對しては數十倍も違ふのである。斯くて我々は好印象百パーセントの内に翌朝午前八時三十八分未だ夜の明け切らぬ間に首府ヘルシンキに着いた。

ヘルシンキ郊外のストランド・ホテルは其の

第五圖 ヘルシンキ郊外ストランドホテル



四元

三三

名に示す通り湖水の様な静かな海岸に臨み、高い小山の上に立てられた當地第一流のホテルで實に居心地のよい所であつた。珍客の我々は暫らく新聞記者に攻められた後、外務省出張員の石井康氏を訪ね、首府見物の計畫を立てて戴いた外にホテル・トルニの十階でスバラシク甘い晝食を御馳走になつた(十一月十一日)。

一體北歐はオードブルが特に甘く、ストックホルムが最も有名な様であるが、フィンランドも之に次ぐものである。又た街の清潔にして美しいこともストックホルムが頗る有名であるが、清潔な事と明るい事に於いてはヘルシンキが遙に優れ、恐らく世界中其の比を見ないであらう。

人口二十五萬の此のフィンランドの首府に滞在し人口三百五十萬の此の歐洲の果の國を少しばかり旅する間に自分は眞に印象深い數々を経験した。

一行の大部分は翌々朝フィンランド海を渡つてエストニアに入り、バルチック海岸諸國を経て

ベルリンに歸つた。坂氏は翌々日(十一月十五日)ストックホルムに立つた。而して自分も街の中央のパンション・セントラルに移つた。

四、フィンランドの氷原遺跡

フィンランド晝集の後語に曰く

「數千年の間に氷と水はフィンランドの土を創つた。而して之は又た其の地上に歐洲には其の比を見ざる程の湖水をも創り出した。幾千年の前か知らねど、今日フィンランドと言はれて居るその土地が氷と水の下にあつた時がある。そしてそれから土地が段々隆起し出し、今日でも尚ほ毎年少しづつ海面の陸化が行はれてゐるのである。斯くて干戈を交へ、平和條約を結ぶ事なくとも我がフィンランドは年々歳々其の處女地を附け加へて行く。」

ヘルシンキ大學のサウラモ教授はフィンランドの氷河研究者の第一人者にして一九二五年出版のフィンランド國表層地質圖には種々なる氷河堆積層の分布が實に美しく示されてゐる。フィ

ンランドでは小山の如き堤防が國の南東部から南西部迄二列乃至三列をなし南に凸面を向けた弓形を描いて連り、汽車に乗つて旅行しても直ちにそれと氣附く程である。又之と直角に昔の氷河の中心から放射する無数の小丘の線が生じ、その或る物は蜿蜒として湖水の中心に天の橋立の如く陸橋を架してゐる。之を此の地ではハルユト (harjut) と言ふ。即ちオーズ (Ose) である。其の成因は氷河の下底を流れた河水に運ばれて堆石が流下堆積されたものである。而して二、三の列をなす堤防は言ふ迄もなく氷原末端に堆積した堆石層である。

フィンランドの殆ど全域がフェノ・スカンヂアの四回 (Yoldia 最古、Rho 古、Rha 新、Ancylius 最新) の氷期に其の氷原の下に敷かれてゐたので地表は著しい削磨を受け、此の爲め眞新しい前寒武利亞紀の基盤の凹地上には淺海性の第四紀間氷期の粘土が堆積し、此の地盤が氷原消失後、荷重を除かれて浮び上つてゐるので、海岸

第 六 圖 湖上に架する氷河堆石丘(Ose)(Tolvajarvi, Finland)



附近の谷の土を掘れば到る處に其の當時海底に棲息した介化石が發見されるのである。こんな譯でフィンランドの人は、自分の國は地盤隆起の結果ボスニア海の水を排し、遂ひにはスエーデンと陸続きになるべきを信じてゐる。但し之は實は信念だけであつて、ボスニア海北端なる隆起の最も甚しい所でもその量は一年に僅か一一耗程度に過ぎぬのである。

五、フィンランドの太陽

又曰く「冬夏の温度の差にも増して其の對象の著しいものは明と暗との差である。北部地方に見る眞夏の夜の彼の明皎たる不斷の光輝は此の目で認め得る天然の最大なる神秘にして同時に莊嚴なる光景である。其處には最早や陰もなく陽もなく、兩者は合一して普天の下唯赫陽の夕映があるのみ。之れを想ふて國外に移住したフィンランド人は懷郷病となり、アメリカに移住して既に半生を送つた農夫も尙ほ之を想ひ、死に先立つて今一度此の夏の明るい夕映を見んこ

とを希ふのである。

明い夏は長い暗い冬と代り北部フィンランドでは冬の數週間に亘り遂ひに太陽を拜み得ない

第七圖

眞夏の夜の太陽 (Inari, Finland)



のも亦た天の制約で致し方ない。然しそれでも明は尙ほ暗に優つてゐる。それは愈々眞冬の最中

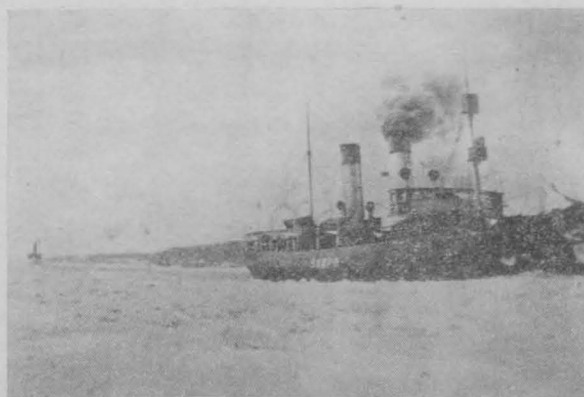
になれば天上は此の極地にのみあるオーロラ・ボレアリス (aurora borealis) に映え渡るからである。」

十一月の中旬から十二月の下旬迄滞在する間にヘルシンキの晝は自分にも感ぜられる程に短くなつて行つた。それに天候は概して曇り勝ちであつたので、室内では終日電燈を必要とするのであつた。稍々天氣のよい日も午前九時半に漸やく夜が明け放れ、午後二時半頃にはもう薄暗くなり出してゐた。十一月も下旬に入つてからエスコラ教授に案内されラバキヴィ花崗岩其他の花崗岩地質をヘルシンキの郊外に見學しての歸るさであつた。彼は暗くなつた道をとぼとぼと歩きながら語り出した。フィンランドの冬は早く暗くなるけれども南の國に於ける様に夜が眞暗にはならぬと。又十一月下旬から十二月下旬あたりがフィンランドでは天氣も悪く、雪もなく最も暗い時で、それから後には地上が雪で蔽はれ、その反射で世界は急に晴々と明るくなる

との事であつた。此の旅行で自分は十一月五日にモスカウに着く前に既に雪を見、其の後フィン

第八圖

結氷せるバルト海とストックホルム通ひの碎氷船
(Turku, Finland)



積つてもその大部分は一兩日後に消えるものであつた。

ランドでは常に白雪を踏み屢々吹雪になやまされながら野外調査をしたのであるが、唯此の頃の雪は

自分はフィンランドに此の最も季候の悪い時の廿數日を送つたのであるが、然も實に言ひ様のない愉快さを感じ寧ろ去るに忍びなかつたのである。十二月に入ると石井康氏はそろ／＼バルチック海の結氷することや自分の外套が毛皮で出来てゐない事などを心配せられ嚴寒の來襲を警告せられた。又實際夜石井氏の御宅に招かれての歸るさなどフィンランド海から猛風が吹き出すと外套は勿論洋服の裏迄一時に冷くなつてまるで裸で道中をしてゐる様な思ひをすることもあつた。此の寒いフィンランドにも一つの凍らない海がある。それは北極洋に面するペッサモ (Petsamo) の海岸である。

石井氏夫妻の話によれば夏のフィンランドは實に天國ださうである。此の國の南端に近い首府でも夏は日が暮れることなく夜十時頃まで太陽があるので、船遊びに水泳に夏中裸かになつて思ふ存分太陽に當り、十分紫外光線を皮膚に吸収させて冬に備へるさうで、然らざれば冬になつてから病氣を起すことがあるとの事である。大學の夏期休暇は他の國と同じく約三ヶ月に亘るが、然して暑さの爲ではなく保健の爲めの休暇であることは勿論である。茲に餘談ではあるが、フィンランドの南の海が淡水であると云ふ事を一寸斷つて置く。(未完)